

Title	<批評・紹介> 李德啓編譯「阿濟格略明事件之滿文木牌」
Author(s)	今西, 春秋
Citation	東洋史研究 (1935), 1(2): 161-164
Issue Date	1935-12-10
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/138675">http://dx.doi.org/10.14989/138675</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

李 德 啓 編 譯

# 阿濟格略明事件之滿文木牌

莫大な清初期の文書類が出現して以來、「檔案」「檔子」等の語が我等の耳に熟すること漸く久しいものがあるが然し檔案、檔子の如何なるものであるかに就いては實は必ずしも明確であつたとは言はれない。楊賓の柳邊紀略

に「邊外の文字は多く木に書く。往來傳遞のものを牌子といふは、木片を削り牌の如きものがあるからである。存貯年久しい者を檔案又は檔子といふは、積累多く、貫くに皮條を以てして壁に掛け、檔の如きものがあるからである。然し今は文字の紙に書するものも亦呼んで牌子檔子と爲す。」とあつて、滿洲の文書記録類を檔案、檔子、檔冊などと稱する由來明瞭であり、又木片貫條の本來の

長二八公分 寬四・三公分



檔案を想像することも、或ひは困難ではなかつたかも知れないが、然し矢張り實物を見得ない憾みには隔靴以上の感があつた。先般、北平の故宮内に於て發見せられた滿文本牌が、特に吾等の興味と注意とを惹いたのは、實にこれが始めて、吾人の眼前に提供せられた木片貫條の古檔案であつたからである。李氏の「阿濟格略明事件之滿文本牌」一書は、該檔案の研究報告であり、題名は氏

が本木牌の性質を明瞭にした結果に成るものである。

氏の記すところによれば「木牌は凡て廿六支、大約五六寸から八九寸長のものであるが、長短寬窄一致せず、白木を以てして塗飾を加へず、隨時木片を削つて作つたものであることは疑ひなく、木片下方には穴を開けて皮條を貫く用に供してゐる。滿文は木片の表裏兩面に認められ、大體戰陣等のことを記載するものであるが、なか

に遞送の用に供したことの明瞭なものもある。」と。而して氏は木牌の滿語全文を譯出し、これが崇徳元年五月、阿濟格略明事件の際に作られたものであることを、太宗實錄所載記事との吻合によつて立證した。但しこの木牌に記載された記事によつて、史上特に注目すべき程の新事實が見出されたわけではなかつた。又氏は木牌記事の内容を以て太宗實錄の所記に比較を求めたけれども、こ

それは實ろ太宗滿文老檔のそれに比較を求める可きではなかつたか。私は未だ滿文老檔を詳しく調査したわけではないから確言は出来ないけれども、滿文老檔崇徳元年七月十九日の條に見える阿濟格等の略明事件に關する上奏文などを見ても、随分木牌の所記と吻合する所がある様で或ひは、こういふ木牌などは滿文老檔の一部資料となつたものではないかとの推測を起さしむるに足るものがある。李氏は始終滿文老檔とも親しんで居る筈であるのにこの點に注意しなかつたことは尠ならず物足りない。

木牌の滿文が老滿文と新滿文との中間形を示すものであつて、fa 字形に wa 字形を、ya 字形に ja 字形を、又 ku 字形に蒙文字母形等を、何れも新滿洲字と共に混淆使用してゐる事實を李氏が指摘してゐることは、既に私は史林(第二十卷第四號、清三朝實錄の纂修)誌上に紹介しておいたが、氏は又清初滿文の s 字が ts、tz の二音の何れをも寫して、蒙文の s z 二音に於て分辨不能のものあるに同じいことを、矢張り木牌中に見える官名の *sumingwen* (總兵官) 地名の *sooin* (涿州) 等の舉例によつて示してゐる。このことは薩滿教の堂子を寫すのに何故 *tangge* としたかなどの疑問に對して、その解答を明示してゐるものである。又支

那語が滿洲語として取り入れられる際に、n 音と ng 音とが相互必ずしも明確に辨音されてゐないことを、わが山本氏は已に早くから氣付いて居られたが、(本誌前號七〇頁參照) 李氏も亦、木牌中の滿洲語によつて同じ事實を明らかにしてゐる。

李氏は本木牌を以て、滿文字體演進史上の絶好資料であると述べ、氏の研究はこの點に於て若干見る可きものがある。然し乍ら卑見を以てすれば、滿文字體の演進史を研究するに必ずしも本木牌を取つて絶好資料であるとする程ではあるまいかと思ふ。李氏が木牌中に採取した程の滿語資料ならば、滿文原檔の忠實な點檢によつて必ず獲取し得るものであらうことを私は信じて疑はない。

要するに本書には「檔案」なるものゝ紹介解説以外さして注目すべきものを存しないが、然し從來記錄にのみ残つて、その實物を見るを得なかつた「檔案」を忠實に描寫して報告したこと、それだけで本書の價值は充分であらう。本書卷頭に圖版として掲載された木牌廿六支裏の寫眞を眺め、かういふ木片が果々として、或ひは又散閑として壁間に垂げられてあつただらう滿洲家屋の内部を想像するだけで結構なのである。

(四六倍版、圖版十六葉本文二十四頁、民國二十四年五月、北平故宮博物院文獻館發行、定價七角)

(今 西 春 秋)